



写真-1 三田市役所 6 階「市民展望広場」から武庫川桜堤を撮影（平成 27 年 4 月）

■ 武庫川桜堤の新たなビューポイント～三田市新庁舎

三田市では、平成 27（2015）年 1 月から新庁舎での業務が始まっていますが、6 階の「市民展望ひろば」からは、写真-1 のように川除（かわけ）地区を流れる武庫川が一望できます。

特に桜の時期は、北摂三田ニュータウンに向かって伸びるピンク色に染まった桜堤の眺望が見事です。このビュースポットはまだあまり知られていないようで、筆者は 2 度行きましたが、親子連れ 1 組に出会っただけです。ここなら、ゆっくりと桜堤を鑑賞できます。ただし、シートを広げて花見弁当を食べるわけにはいきません。もちろんお酒も……。



写真-2 川除上橋から上流を撮影

■ 行基が行った治水工事が「川除」の由来

奈良に都があった頃、行基というお坊さんが、諸国をまわって修行されていました。川除を通られた時、村が洪水に悩まされていることを聞き、治水工事を進められました。「松山のゆ（井堰）」をつくって用水を引いたり、川を遠ざけて、洪水から村を守るようにされました。このことから「川除」の地名が起りました。

写真-3・4 は、現在の松山用水の取水施設です。元の「松山のゆ」は亀甲型の石積堰で、旧御殿橋上流 200m にありましたが、昭和 45（1970）年度に着手した中小河川改修事業により現在の位置に機能補償されています。それは、三田大橋直下に設置したラバーダム（三田市上水との共同施設）で堰き上げ、西谷川合流点下流左岸においてポンプアップにより取水するもので、松山用水水利組合が管理しています。



写真-3 松山用水取水施設（ポンプアップ）



写真-4 三田大橋直下の取水施設（ラバーダム）

■ 川除地区にある「松山堤」の由来

三田市天神にある兵庫県三田庁舎を出て一般県道 141 号黒石三田線（以下「黒石三田線」という）を北西方向に進むと、松山堤（まつやまつみ）交差点にさしかかります。かねてから、「松山堤」の由来が気になっていたもので調べてみました。

「松山堤」は、かつて川除地区を流れる武庫川の堤防でしたが、河川改修（ショートカット）により現在は黒石三田線の道路敷になっていて、その名は『三田市史』にも登場する中世・松山荘の荘官だった「松山弾正」に由来するとされています。

松山弾正は、大和国城上郡（しきのかみのこおり：現・桜井市）松山の出身で、藤原魚名（ふじわらのうおな：721～783 年、藤原不比等の孫）の末裔だそうで、建武の頃に宮方（南北朝時代の南朝側についた勢力）代官としてこの地に来て川除村に住み城山を築き、三輪村を城下村としたとか。弾正は、文和年間（1352～1356 年）に三輪明神を天神山より丸山（現在地）へ勧請して三輪神社の社殿を造営したと伝えられています。その三輪神社社記によると、三輪、高次（たかすぎ）、桑原、田中、山田の 5 村（いずれも武庫川の左岸側）を「松山荘」と称していたそうです。

松山弾正が築いたといわれている「松山堤」について、いくつかの文献を調べた結果が以下のとおりです。

- ①『三田市史・下巻』・『三輪区史』：いずれも松山弾正の記述はあるが、松山堤の記述なし。
- ②『さんだ人物誌』：「松山弾正は松山荘の荘官として農地の開墾を行うとともに武士団を抱え……（中略）……松山堤という名称が今日も伝えられるのは、松山弾正が開墾地主として治水や開墾に熱心であったことを示唆するものであろう。」とあり具体の記述はない。ただ、「松山荘」は武庫川の左岸側に位置しており、そこに広がる人家や農地を守るためであれば左岸側に堤防を築くはずだが、県道敷となっている「松山堤」は右岸側の堤防である。
- ③『北摂三田の歴史』：「松山堤」に関して具体の記述がある。「松山氏には土木工事等領民のための治績もあり、武庫川における天神から上流の場所が松山の堰（松山堤）と呼ばれることなどにその名残が感じられる。（一方、松山の堰は行基が築いたという伝説もある。）」（原文のまま）とある。



写真-5 松山堤（黒石三田線の歩道部）



写真-6 「松山堤」交差点



写真-7 松山堤（松山堤交差点より南）

『北摂三田の歴史』は、「松山堤」に関して唯一具体的記述がありますが、「松山の堰（松山堤）」は意味不明です。「堰」と「堤」は全く別物ですが、「天神から上流の場所」と区間を明示しているので「井堰」ではなく「堤」を指していると思われます。

ただ、堤防を築いたのであれば、前述のとおり松山氏の領地がある左岸側に築くはずで、領地外の右岸側に堤防を築くことは考えにくい。「松山荘」が由来との説もありますが、右岸側は「松山荘」ではありません。いずれにしても、「松山堤」については、「……と呼ばれている」といった程度で、その由来を示す信頼できる文献が見つからず、よくわからないというのが実態です。



図-1 河川改修に伴い生じた旧河道と松山堤

■ 水害の歴史を伝える一乗寺跡

JR 福知山線および神戸電鉄の三田駅前で、昭和の商店街の風情を残しているのが中央町界隈です。その商店街の中ほどを、通りに直交して水路が流れ、そこに万年橋 (写真-8) という小さな橋が架かっています。といっても、今は水路の大きさに比べて橋が大きすぎるので、モニュメントとして橋っぽく整備されているに過ぎません。かつてその橋が架かっていた一乗寺の庭池 (一乗寺池) は、今は埋められて一乗寺公園 (写真-9) になっています。



写真-8 万年橋



写真-9 一乗寺公園



写真-10 公園の隅に置かれた旧万年橋の親柱

一乗寺池があったこの辺りはかつて武庫川の堤で、洪水のたびによく切れる「正宗堤」(名刀正宗に例えて切れやすいという意味で「かみそり堤」と同義)があったとか。

江戸時代にも桶屋町※1 辺りは度々水害があったらしく、ある時、大水害に見舞われ多くの犠牲者が出たことから、桑原にある正覚寺の住職が一乗寺を建てて犠牲者を弔ったそうです。一乗寺には、庭池である一乗寺池があり、そこに架かっていたのが旧万年橋です。

明治になり廃仏毀釈で一乗寺が廃された時に、寺の墓は正覚寺に移されています。そして、一乗寺池に架かっていた旧万年橋の親柱が一乗寺公園の隅に置かれています（写真-10）。

また、公園には一乗寺南地藏尊が祀られています（最近、祠が新調されたようです）。

※1 桶屋町：現在の「中央町一番街」。明治5（1872）年の史料によると、呉服や古着、大工、鍛冶屋などが軒を連ねていた。



写真-11 一乗寺南地藏尊

江戸時代より一乗寺（その後は廃寺となり正覚寺に合祀）現在の「一乗寺公園」のほとりに安置され、度重なる水害に依る被害より住民や子供を守り、病氣、災難、水難除けの地藏尊として、又子安の地藏尊としても世代の人々の信仰を集めると共に、北向き地藏尊として親しまれ現在まで引き継がれて参りました。

地元では一乗寺南地藏尊講としてお祭りをしております。毎年八月二十四日の地藏盆には数珠くりを行い、お祭りをいたしております。

一乗寺南地藏尊

「一乗寺南地藏尊」解説板

■ 川除の蛇行部をショートカット、構想から半世紀を経て完成

かつての武庫川は三田盆地を大きく蛇行しながら流れていて、特に川除地区はその地名が示すように毎年のように浸水被害に悩まされてきた所です。そんな地域でもいざ改修をするとなると、なかなか地域の合意形成は難しく、昭和7（1932）年の水害を契機に昭和8（1933）年より第1次改修工事に着手、昭和25（1950）年までの間に、山田川合流点より相野川合流点までの約11kmが改修されますが、蛇行部はそのまま。

その後、社会経済の発展に伴い守るべき資産も著しく増大、計画降雨を上回る豪雨も観測されるようになってきたため、昭和45（1970）年に「武庫川全体計画」を策定し、羽束川合流点付近から相野川合流点まで約12.5kmの第2次改修を中小河川改修事業として着手します。河積の拡大と併せ、河道を直線化（ショートカット）し、堤防も強化しました。この改修により旧川の右岸堤防だった伝承の「松山堤」は、黒石三田線の道路敷になっています。

また、池尻川の合流点付近には、構想から半世紀を経て竣工した武庫川改修工事の記念碑があります（写真-12）。記念碑の裏面に記されている碑文は下記のとおりです。

碑文

川除はその歴史を武庫川と共に刻んできた。関連の発掘調査によると弥生時代の後期には先人達は野山を下り川辺で原始農耕を始めていたと思われる。八世紀初めに僧行基の手を借り野上の針杭井堰から水路を導き水田を涵養してきた。母なる川は稲作等に恩恵をもたらす一方、しばしば農作物や住民の財を奪つこともあった。江戸時代、この地は摂津国「川防村」と呼ばれ、文字通り川との苦闘を繰り返してきた。昭和十一年（一九三六）第一次武庫川改修のとき、蛇行する当地付近の川を直線化する、いわゆるショートカット構想が示された。しかし村の衆議は大幅に地形を変える大変革を受け容れなかった。終戦の年、御殿橋下流の堤防が決壊し市街地は水浸しになり、その後も街は慢性的な水害を繰り返していた。

昭和四十五年（一九七〇）に兵庫県からニュータウン開発に伴う多目的ダム建設と河川改修計画が示された。このときも河川のショートカットは地区内の豊かな農地の一部が川床となるほか地域を川で南北に分断されることへのこだわりが強く、十四年間に及ぶ苦悩の歳月が経過した。

一方永い年月の流れは人々の心を変え始め、地域の歴史を塗り替える大事業の受け容れはふる里創造の活力になるとの意識変革をもたらした。その結果昭和五十九年（一九八四）に河川改修の受け容れを決定。併せて圃場整備の施工に踏み切った。

当初構想より実に半世紀を経ての決着である。この間諸問題に直面したが、兵庫県、三田市をはじめ諸機関の指導と援助、関係者の協力の結果、今日の完工を見るに至った。

よってここに記念碑を建立し、永く後世に本事業を伝えようとするものである。

平成六年（一九九四）十月

川除土地改良区理事長 市田 巖

■ モノローグ

川を身近な自然として愛し、安全で美しい県土を創出するとともに、地域交流を深めてもらいたいという願いを込めて、兵庫県土木部が、平成3（1991）年度から平成12（2000）年度にかけて、瀬戸内海と日本海を結ぶ延長約170kmの河川沿い（武庫川～篠山川～加古川上流～円山川）を約5万本の桜でつなぐ『ふるさと桜づつみ回廊』を整備しました。

この施策は、平成2（1990）年頃、河川課のK補佐（後の県土整備部長）が新規施策として提案されたものですが、早いもので完成から四半世紀が経過しようとしています。桜の木もずいぶん大きくなって、太い桜の花の帯が延々と続いている様は壮観です。



写真-12 武庫川改修記念碑

スイセン（水仙）

ヒガンバナ科スイセン属の総称と呼ばれている。原産地は主にスペイン、ポルトガルを中心に地中海沿岸地域。Narcissus という学名は、ギリシャ神話に登場する美少年ナルキッソスに由来する。「スイセン」は、中国での呼び名「水仙」を音読みしたもの。「仙人は、天にあるを天仙、地にあるを地仙、水にあるを水仙」という中国の古典に由来する。水辺で咲く姿を仙人に例えたのか。別名に雪中花。全草有毒なので注意！！



写真-13 武庫川河畔に咲くスイセンの花

【参考資料】

- 1 『三田市史・下巻』 三田市史編纂委員会 昭和40年3月
- 2 『みんなわまっぷ〜行基さんの杖あと』 三田市教育委員会 平成7年
- 3 『さんだ人物誌』 NPO法人 歴史文化財ネットワーク三田 平成26年5月
- 4 『北摂三田の歴史』 北 康利著作・発行 平成12年8月
- 5 『三輪区史』 三輪区 平成10年7月
- 6 『スイセン』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和2（2020）年4月 『ひょうご水百景』No.107

改訂：令和8（2026）年6月 『ひょうご水百景』No.107